

# 国際シンポジウム

## 北朝鮮脱出者の文学活動と韓国文壇

—「脱北者」による記録文学の現状と課題—

開催日時 平成28年10月1日(土) 14時～18時

開催場所 富山国際会議場大手町フォーラム 会議室205

北朝鮮脱出後韓国で文学活動を行う3名の作家、  
迎え入れる側の韓国文壇の文学者1名を迎えて、  
講演と公開討論を行います。

プログラム前半 脱北者作家から自身の作品の紹介、創作活動の理念についてお話していただきます。

14時 이지명 イ・ジミョン 脱北者作家。北朝鮮の咸鏡北道清津出生。2005年から在韓。  
15時 도명학 ト・ミョンハク 脱北者作家。北朝鮮の両江道恵山出生。2006年から在韓。  
16時 설송아 ソル・ソンア 脱北者作家。北朝鮮の平安南道出生。2010年から在韓。

プログラム後半 17時～

方珉昊(방민호 パン・ミンホ ソウル大学国語国文学科教授)及び  
和田とも美(富山大学人文学部朝鮮言語文化研究室准教授)を交えた公開討論。

韓国に定住する北朝鮮からの脱出者すなわち「脱北者」は3万人を超えています。  
「脱北者」の多くは資本主義社会への適応に困難を抱えています。  
その中で、北朝鮮の状況を文学表現によって伝えようとする「脱北者」も登場しています。  
「脱北者」の文学活動は、韓国社会への社会参加であると同時に、北朝鮮の状況を伝える  
「記録文学」の一形態として機能する可能性を有しています。  
また韓国文壇はこれをどう迎え入れているのか、その現状を把握し今後の課題を探ります。

\* 講演・公開討論の使用言語は韓国語です。日本語への同時通訳または訳文の配布を行います。

主催 富山大学人文学部東アジア言語文化講座朝鮮言語文化研究室  
オーガナイザー 富山大学人文学部朝鮮言語文化研究室准教授 和田とも美  
連絡先 e-mail: twada@hmt.u-toyama.ac.jp Tel: 076-445-6206(研究室) Fax: 076-445-6141(学部共用)  
参加費無料、申込不要です。資料を必要とされる方は事前連絡をお願いします。



文部科学省平成28年度科学技術人材育成費補助事業  
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)  
Initiative for Realizing Diversity in the Research Environment



## 作品紹介

\*南北作家共同小説集『국경을 넘는 그림자』(2015年 예옥)所収 日本語訳:和田とも美

### (イ・ジミョン「不倫の香気」より)

「一切が跡形も無く消え去りました。一筋の髪も見えない禿げた頭を掴むこともできず、それがまるで私の責任であるかのように、妻は仕事から帰宅する私を敵意に満ちた目で睨みつけたものです。胸が潰れました。赤ん坊が乳をねだって泣き、母親はそれを知らんぷりして、夕飯の支度どころか片付けもされていない部屋は荒れ放題でした。最初は哀れに思い、家に帰り着くとすぐさま部屋を片付け、食事の支度をし、食べないのを無理に食べさせ、結婚を誓った時の気持ちに忠実であろうと努力しました。夜通し抱きかかえ、薬を使えば髪の毛もまた生えるだろうからそんなに落胆しなくてもいい、と子供のようにあやしてなだめましたが、妻のうつ病は次第に深刻になって行きました。歳月が過ぎれば少しは良くなるだろうと言い聞かせ、それでも生活を維持して来ましたが、雪上に霜加わると言うように、国家食料配給が本人にだけ実施されることになり、家族の分は自己責任で解決しろという指示が出されました。最初はそのうち再開されるだろうと思っていましたが、なんと六年が過ぎてもそのまま、そういう状態で、そのあり様でした。本当に、生活しているというよりも、生命保存の為の戦争をしているとでも言えればいいのか、二度と思い出したくない苦難の日々でした。」

### (ト・ミョンハク作「本泥棒」より)

いつまでもそのまま歳月が過ぎて行く筈だったのに、いつからかゆらぎ始めた。最初は食糧配給が一日、二日と遅れ始め、数年後には全く途切れてしまった。国中が叫び声で満ち溢れ始めた。人々が飢えて死に始めた。国は一時的な危機だと言ったが、終わりが見えなかった。国は追い詰められて「苦難の行軍」と称した。人びとは市場に出たり、山に登って猫の額ほどの畑を作ったりした。それでも作家はなすすべが無かった。食事は無い時のほうが有る時よりずっと多く、朝飯抜きの出勤の道は、脚がふらふらした。

妻は耐え切れずに国から贈られたテレビや冷蔵庫を売り払い、商売の元手をこしらえた。けれど商売上手な人間とは違った。どんなに努力しても、どうしたことか逆に損をする商売ばかり繰り返した。そのうえ他人に簡単にだまされるのだった。互いにつぶし合い生死を争う白兵戦で詐欺にも何度か引っかけられた。そのうちまともな物品はほとんど売り払い、家の中は長い棒を振り回してもひっかかる場所もないあり様になった。一日また一日と、生き続けていることが奇跡だった。事ここに至って、妻の目から鱗が落ちた。作家？それがなんだっていうの？小説？うそっぱちでしょ。空腹がデモ行進する世の中で、どんな文章を書くつもりで昼夜机に向かっていられるのか。いっそ土方仕事をする労働者のほうがましだ。彼らは汽車に乗ってとうもろこし売りだつてやる。それでもだめなら農場の畑に忍び込んで盗みだつてやる。混乱する世の中では何の役にも立たないのが作家だった。

### (ソル・ソニア作「チノクという女」より)

チノクは当年とって二十歳だった。五年前結婚したが、まだ出産はしていない。彼女は努力して妊娠を避けた。二日も月経が遅れると妊娠ではないかとびくびくして、虫下しを飲んだりアスピリンを飲んだり、一人で焦った。これまでは毎回うまくやり過ぎて来た。夫が不妊を疑って治療を受けようと言うたびに、心の中で笑っていた。見た目には立派な夫が妻に尽くすことは一切無く、工場への出勤だけは完璧だった。それがまたチノクの目には間が抜けて見えた。

間の抜けた夫に、チノクは夫の父の紹介で出逢った。初めて出逢った時、チノクは見合いをしたというよりは、幹部の息子という圧迫によってすでに定まった夫の顔を確認したのだった。或いは、夫の父の希望で成立した結婚と言ったほうが正確だろう。

夫の父は「化学工場一級企業所幹部課長」だった。「幹部課長」は自分の息子と結婚させてチノクを他の男にやるまいとした。数年前からチノクは、夫の父と内縁関係だった。